幻想郷の子供な神タマ？

天叢雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想郷の子供な神タマ？

【Ｎコード】
Ｎ７２０９Ｚ

【作者名】
天叢雲

【あらすじ】
幻想郷に最強すぎるけど子供な神様みたいなのがいたら？という欲望を具現化したものです。
息抜きみたいなんでツッコミはいりません。

ぷろろ～ぐ

とある森の奥にて・・・。

幻想郷の賢者と呼ばれるスキマ妖怪八雲紫、その従者である九尾の八雲藍は洞窟の前に立っていた。

「・・・紫様、ここが・・・？」

「ええ。強力な結界が張られてる。それも博麗神社の大結界よりも強力な代物がね・・・」

「本当に、ここにいるのでしょうか・・・」

「伝承ではこの魔の森、遠い昔より禁忌とされてきた幻想郷の知られざる場所。ここに“彼”が封印されているそうよ・・・まだわからないけどね」

スキマ妖怪、八雲紫は考える。

自分の理想である幻想郷をさらに発展させるにはまだまだ力が足りない。

だからこそ、嘘か本当かもわからないような伝承を頼りにこの禁じられた魔の森へと訪れたのだ。

その場所は死者、亡者、地獄から堕ちた妖怪達がいると噂され、知られていないものの、知るものすら近付こうとしないのだ。

「・・・気を引き締めなさい藍。伝承が本当ならば私達が相手にしても勝てる見込みはゼロ。隙をついて式神契約の儀式をするわよ」

「はい紫様」

魔の森の最奥に封印されているモノ、それは様々な伝承があり、八雲紫はそれを調べ回り、ソレの輪郭はぼんやりとだが、わかった。

曰く、世界の始まりと共に生まれた全ての生命の始まりであり、源である。

曰く、世界の理を創った神である。

曰く、その絶対的な力により、人間、妖怪、神、精霊、妖精など、あらゆる命を産み出した。

曰く、次元や時空を操る力を持ち、手に入れれば瞬く間に世界を支配できる。

曰く、未知なる体を持ち、宇宙より飛来した未確認生命体である。

様々な伝承があるが、信頼できる情報源から得られた情報がある。

それは・・・世界を一度喰らい、永遠の眠りと共に世界に封印されている。

「・・・できたら当たってほしくないわね。世界を喰らうなんて神すら不可能。逆鱗に触れれば瞬く間に世界は終わる・・・」

「紫様・・・大丈夫です。紫様ならなんとかなりますよ。それに橙も置いて逝くわけにもいきませんしね」

「そう、ね・・・やれるだけやりましょう。これが成功すれば私の計画は加速度的に進められるわ」

八雲紫は自分の能力である“境界を操る程度の能力”と自らが長年、培ってきた経験により、結界の解除をする。

途端、結界が張られていた洞窟から凄まじい気配を感じ、二人は気圧される。

百を越える年月を生きてきた大妖怪の二人でも、経験したことがない膨大な、そして明確な“死”のイメージに怯える。

しかし、八雲紫は能力を使い、無理矢理理性を保つと洞窟の中に踏み込んだ。

後には同じく、理性を保たれた八雲藍が続き、主である八雲紫の後を追った。

「藍、大丈夫かしら?」

「な、なんとか・・・ですが想像を遥かに超えてますよこれは・・・紫様が理性を保ってくれなければ発狂します・・・！」

「確かに私でもキツすぎるわ・・・さすがは始まりと呼ばれる存在・・・！」

二人は飛びそうになる意識を必死で繋ぎ止めながら、奥へと進む。

そして、それを見つける。いや、見つけてしまった（・・・・・・・）。

まるで竜のような体を持ち、色は漆黒に所々に金色、開けられた目は金色に爛々と光る、二人より二回り以上大きいバケモノ。

封印されているはずなのに二人は睨まれてるように錯覚した。

「・・・こ、これが・・・世界の始まり、“災厄（ノヴァ）”と呼ばれる神・・・」

「なんて・・・なんて大きい・・・」

“災厄（ノヴァ）”と呼ばれる存在、それが八雲紫が探していた最後の鍵とも言える存在。

封印されているのか、手足や胴体には錆び付いた鎖が巻き付けられ、今にも崩れそうだった。

だが、八雲紫と藍はその鎖から膨大な神氣、つまりは神のみが持てる力の源を感じた。

それ一本につき、神氣が彼女の知る神の軽く見積もって十人分の力が込められており、驚愕した。

それ一本でも凄まじいのに、数えて八十七本以上の鎖が“災厄（ノヴァ）”に巻き付かれてることに、八雲紫はさらなる驚愕を見せる。

自分のような妖怪があれだけの封印をしなければならないバケモノを御せるのだろうか？

もし失敗したら？

最悪、“災厄（ノヴァ）”の怒りに触れ、幻想郷どころか、外の世界すら破壊されてしまうのでは？

そう考えると自分がどれだけ浅はかな事を考えていたか思い知らされ、嘆く。

「・・・戻りましょう、藍。あれは私達の手には追えない、触れてはならないモノだったのよ・・・」

「！ゆ、紫様！あれを・・・！」

「う、嘘・・・封印が・・・解かれて・・・？」

気が付くと、封印の鎖が溶けるかのように風化し、次々と消えてい

く。

それを見て慌てる二人だが、紫は理由に気付いた。

「まさか・・・あの結界は封じるためではなく、外との繋がりを断つため（・・・・・・・・・・・・）の結界だったの！？なら結界を解いたことで外と繋がり、なんらかの影響で封印が・・・」

「紫様！早く脱出を！ここにいては危険・・・」

すると、ピシリとバケモノの体に輝が入る。

その音に二人はビクッと体が動き、同時に動けなくなってそれを見ることしか出来なくなっていた。

徐々に輝が広がり、全体に行き渡ると、硝子のように砕け散った。

「「え・・・？」」

『・・・ρθηψνξδβνψ？』

「は？」

その砕けたバケモノの中心にナニカが浮かんでおり、何か、理解不能な言語を発する。

八雲の主従コンビは首を傾げるが、そのナニカはキョロキョロと辺りを見回していた。

そして、二人を見つけるとそれはゆっくりと地面に降り立つ。

そのナニカを表すなら“黒”。身体全体を覆う長い黒髪により、全てが黒に染まっていた。

ナニカは二人の前に立つと二人は緊張のあまりに息すら忘れるほど、それを見ていたが・・・。

『・・・オナカ、スイタ』

「「・・・・・・・・・・・・んん？」」

それが発した言葉を理解すると二人は顔を見合わせてさらに首を傾げ、ナニカもまた、首を傾げるように髪が動いた。

・・・あまりの展開に二人はまだ知らないようだが、ナニカは“素っ裸の男”であり、“男の象徴”がさらけ出されているのはまだ気付いていなかった・・・。

それに気付いて叫ぶのは近い未来。

第一節（前書き）

なんか消えたから再投稿。

第一節

ムグムグムシャムシャバクバクゴキュゴキュ

「・・・・・・」

「わ、わ～・・・・凄いですね。紫様」

『αφκνοξεζ』

「・・・正直、よくわからないわね・・・言語も理解不能だし、私達に通じる言葉は“お腹すいた”だけだし・・・」

『オナカ・・・スイタ？』

「あ、ああ。気にしないで食べなさい。藍！まだまだ追加できる！？」

――無理です紫様ー！食材が足りませんー！

従者の声を聞いて主、八雲紫は頭を痛め、目の前でどんどん料理を食べる男にも女にも見える人物を見る。

彼（見た目は彼女？）は口の中に食べ物をパンパンに詰めながら咀嚼すると、藍の手作りのおにぎりに手を伸ばしていた。

一見、無表情な彼（彼女？）はもう八雲家の二週間分の食材を喰らい尽くしている。

時を戻して、魔の森の洞窟で見つけた“災厄（ノヴァ）”から出てきた長い黒髪の人物を保護し、八雲家のある八雲屋敷に連れてきた。

最初、魔の森から帰る際に、その人物が男であり、素っ裸だと知った時は藍と顔を真っ赤にして慌てたわね・・・。

スキマにあった適当な衣服を貸し出して着させようとしたけど、彼はやり方がわからないのか、首を傾げて衣服を持っていた。

仕方がなく、藍に（無理矢理）頼んで着させたけど顔は真っ赤なままだったわ。

『ξνοε？』

「ふぇーん。紫様ー、何言ってるかわかりましぇーん」

「まずは言葉を教えないとどうにもならないわね・・・」

よくわからない。私も長いこと生きてるけど、この子の言葉を聞いたことがない。

道中に、神やら精霊達とも話し、言葉を教わったが、どれも違う。

発音など根本的な部分から違うので何の言語かも予想もつかない。

・・・というか、いつまで食べるのかしら？

「ゆ、紫様～！食材が無くなりました～！」

「・・・呆れた。なんなのこの子は？」

「あ、それは・・・」

ふと、橙が慌てたように声を出したので見てみると、幻想郷で有名な文々。新聞を穴が開くように見ている彼がいた。

体育座りをしながら新聞を見る彼はただただ、見るだけで動こうとも、残った料理を食べようともしなかった。

しばらくすると、何かを呟くように口を動かすと新聞を橙に渡した。

無表情のまま、下に流れるように下ろされた髪の間から見える口が動いた。

『ワカ、リマス、カ？』

「え！？」

「に〝ゃ！？」

「嘘・・・演技じゃないとしたらなんて学習能力なの・・・」

『ア、ノ・・・？』

「え、あ、私かしら？どうかしたの？」

『オナカ、スイタ。モット、タベタイ』

唖然とする八雲家。

あれだけ食べたのにまだ食べると言うから無理もないだろう。

しばらく固まる八雲家だが、家長の八雲紫のため息により、沈黙が破られる。

「・・・はーっ。仕方がないわね・・・まずは髪を切ってちゃんと服を着てからにしましょう。藍、お願いできるかしら？橙も」

「髪を切るくらいなら・・・」

「お任せください紫様！」

『？？？』

藍は渋々、橙は元気よく返事をすると、“災厄（ノヴァ）”らしき子はまた首を傾げていた。

まだ何もわかってないのかしら？一般常識がないのかしらね。

・・・それよりも、髪が長いわね・・・前髪は足まで伸びて顔どころか身体まで隠してるし、後ろもまた、踵を容易に越える長さで床の畳に広がってるわ。

よくご飯が食べられたわね。と感心してると藍と橙があの子を連れて浴室まで行ったようだ。

「・・・まるで嵐ね。ご飯は食い散らかすわ、いきなり喋り出すわで・・・」

でも、悪くないと感じてる自分がいる。

むしろそんな時間が心地よいと私の心が告げてるわ。

式神契約をした藍の感情も私と同じように安らいだ感じもしているし。

・・・伝承の通りか・・・。

私の手にあるのは、今まで“災厄(ノヴァ)”について調べたことを纏めた文書がある。

「・・・これね。“彼が発する空気は何者にも安らぎを与え、受け入れてくれる”。眉唾物だけど認めるしかないわ・・・」

――あ、待て！まだ流していないだろう！

――あわー！藍しゃま！浴室から逃げちゃいました！

――δζρστψλβ！！

「・・・騒がしいわね。何があっ・・・・」

振り返ると私は後悔したわ。

ドタドタと廊下を走るあの子は髪を濡らし、泡をつけたまま何かから逃げるように全力疾走していた。

・・・髪が後ろに流れるように動いていたからその・・・見えてしまったのだ。股間のアレが。

「待て待て待て！いつの間に腰に巻いた布を取った！いいから浴室に戻れ！」

『イヤ・・・ダ！』

「〜〜〜！いいから戻りなさい！！」

パカッ♪

『ψτζ！？』

「あ、ちょ！私までぇぇぇぇ・・・！」

私は能力を使い、スキマを開いて浴室に出口を繋いで二人を落とした。

赤くなる顔を扇子で扇ぎながら落ち着かせると、また浴室からギャーギャーと騒ぐ声が聞こえてきた。

・・・まるで子供ね。と思っていると頭の中で歯車が噛み合う音が響いた。

「もしかして・・・彼は子供なのかしら？言葉は知らないのはわからないけど、風呂を嫌うところは子供・・・さっき大量にご飯を食べたのは新鮮な感覚だったから・・・かしら？」

だとしたら辻褄は合う気がするわ。

おそらくなんらかの理由で精神が子供に逆戻り、太古の昔から目覚めたばかりの彼は今の言葉を知るわけがない。

そして、食事も初めてだったのでしょう。無表情だけど嬉しそうな感情は伝わってきたから。

つまりはここにある全てが彼にとっては新しい体験、畳をはーっと感嘆の息を吐きながら触っていたから。

『ミ、ミャウー』

「・・・藍に橙。なにこれ？」

「あ、いや・・・暴れるから陰陽道の術で抑えて洗ったらこうなりまして・・・」

「少し、やりすぎちゃいました・・・」

藍と橙があの子を洗い終え、こちらに戻るとぐったりと畳の床に寝ていた。

長い髪は洗ったせいか、黒く美しい髪をしており、まるで僅かについた水滴が宝石のように輝いていた。

女として嫉妬はするが、本人の脱力感というか、疲れきった顔を見るとそっとしてあげたくなった。

「・・・藍。水か何かをあげなさい」

「あ、はい。わかりました」

若干、逆上せてるようなので、水を飲ませておいた方がいいだろう。

こうして、目覚めた“災厄（ノヴァ）”の初入浴は終わったのであった。

第二節

『ウ、ウー？』

「こら。じっとしてるんだ。切りづらいだろう・・・」

入浴を終えた彼を藍が後ろから長い髪を切っていく。

いかんせん、あまりにも長いために、藍は手に持つハサミと櫛以外に自身の九本の尾を鋭くして余分な髪を切っていた。

その傍ら、主と従者の八雲紫と橙は髪を切る藍を眺めながら、切られた髪を触っていた。

「・・・サラサラね」

「サラサラですね」

切られた髪に触れてみるとあまりのサラサラ感に、スルリと持っていた手から落ちていた。

紫はその髪と自分の金髪を比べるように触るが、違いは一目瞭然。かなり落ち込んでいた。

「理不尽。理不尽すぎるわ・・・なぜ私よりも上質な髪なの・・・？」

「橙～。悪いが切った髪を纏めてくれるか？」

「はーい。藍しゃま～」

項垂れる紫を無視するように藍が切った髪を橙が箒とちりとりで回収していた。

その頃、髪を切られてる彼はちょこちょこ動き回る橙を見ていた。

正確には、橙のお尻についている二本の動く尻尾を興味深そうに眺めていた。

「・・・ん？どうした橙を見つめたりして？」

『ウ、ウー。アー』

「・・・尻尾？あれが気になるのか？」

『アウ！』

「ま、まあ。髪を切り終えたら私のを触らせてやるから今はじっとしてるんだ。いいな？」

藍は手のかかる子供、実際に子供なのだが、あやすように言うと、

髪を切ることを再開する。

落ち込んでいた幻想郷の賢者である八雲紫はジッと髪を切られる彼を見つめた。

・・・気になるわ。あの子供っぽい仕草もだけど、能力とかはあるのかしら？

“災厄（ノヴァ）”と呼ばれるほどの存在だから何かしらあるはずなのだが・・・。

「（・・・少しだけならいいわよね？）」

八雲紫は持っていた扇子を軽く振るうと、能力を発動させて彼を調べようとする。

それと同時に大人しく髪を切られていた彼は何かに反応したかのようにバッと紫を見ると、髪の間から覗く金色の目が紫を射抜く。

その目は敵意が宿り、全てを見透かすような光を灯しており、紫は蛇に睨まれる蛙のように体を強張らせた。

「（くっ・・・まさか一瞬で見破られるなんてどれだけ規格外なのよ！まずい。ここで敵だと思われたら殺される・・・！）」

「？どうしたんだ？」

『βρσλψτ！λφυＥχψν！』

「・・・紫様？何かしたんですか？」

「・・・ごめんなさい。つい、気になってやってしまったの・・・」

罵声を浴びせるかの如く叫ぶ彼に謝る主人に藍は何が起きたか戸惑うが、すぐに能力で彼を調べようとしたことがわかった。

藍はまず、叫ぶ彼の頭を撫でながら落ち着かせ、元凶である紫に説教をしていた。

その間も、彼は紫を睨むように見ていたが、説教する藍の九本の尾が目に入り、そちらに興味が移った。

敵意が無くなったことに気付いた二人、片方は安堵のため息をつき、片方はやれやれといった感じにため息をついた。

『・・・？』

「「・・・嘘ぉ・・・」」

「はわ～。凄い似合いますね～」

鏡を見ながら触る彼、髪を切り終えた彼を見て呆然とするスキマ妖怪と九尾の妖狐、うっとりとした様子で見つめる猫又妖怪がいた。

彼はしきりに鏡を触ったり手を上げたり、髪の毛を弄ったりしていた。

それを見て、主従コンビはヒソヒソ話を実行。

「あれ・・・あの子なの？ガラッと様子も変わったし、女の子みたいよ？」

「い、いや・・・まさかこうなるとは私も予想できませんでした」

髪を切り終えた彼、前髪は顔が見えるくらいに切られ、軽く顔にかかる程度。横もかなり切られ、耳に少しだけかかる程度に、揉み上げは顎から少し出る感じ。後ろは腰の辺りまでバッサリと切り、ストレートに伸ばす。

見た目は完全に女性のそれであり、主従コンビはやっちまった的に頭を押さえた。

近くで見ればまだ男性と認識できるが、人によっては違う見方をする可能性があるため、襲われる心配が増えた。

なので、服装は男性用のそれを着させてみたのだが・・・。

『？？？』

「・・・完全に男装してるみたいじゃない・・・」

失敗。裾が長い男性用の和服のようなものを着させたが、三人の目には男装した美人に見えてしまう。

オプションに右肩から左下に流すように、垂れ幕のような白い布を着させるとなんとか男性に見えてきたため、一安心。

「あの～、紫様？」

「あら。なにかしら橙？」

「さっきから気になってたんですが、あの人の名前ってなんですか？」

「「・・・・・・・・すっかり忘れてた・・・」」

まだ拾った？ばかりなので名前など無く、本人も知らないようなのでどうするかを決めていなかった。

結論として。八雲家三人で名前をつけることにした。

「・・・何かないかしら？」

「ありませんね」

「思い付きません」

かなり難航しているようである。

話題の中心となっている彼は、紫からもらった服を纏い、庭の鹿威しを面白そうに見ていた。

彼の頭の上には、八雲家に迷い込んだ小鳥が羽を休めるように止まっているのは気にしていない様子である。

かこーん。

『ハー・・・』

鹿威しから鳴る音に和んでいる彼であった。

「・・・暢気すぎるわね。あの子、本当に伝承の存在なのか怪しくなってきたわ・・・」

「いいじゃないですか。たまにはああいったものを見て和むのも一

興ですよ紫様」

「それより、そろそろおやつの時間ですね。羊羹をお持ちしましょうか？」

「んー・・・・頼んだわ。橙」

「はい！」

うんうん考えていた三人は小腹が空いたためにおやつを食べることにし、彼の名前を決める会議は一時中断。

残った紫はまだ鹿威しで遊ぶ大きな子供を優しい眼差しで見守る。

「・・・たまにはいいわね。いつも気を張ってちゃ、疲れちゃうわ」

『オー・・・・』

「・・・・・・・・・・・あ、そうだ。確か伝承に名前が・・・・」

鹿威しの竹をちょんちょんと触る彼を見て、何かを閃いたのか、紫はパラパラと文書を捲り始めた。

目的のページを見つけると、満足そうに頷き、名前を決めた。

「うん。これなら似合いそうだわ」

「紫様～。お茶と羊羹です～」

「あら。ありがとうね橙。ねえ、あの子の名前、決めたわよ」

「にゃ？本当ですか紫様？」

「ええ。藍が来たら話しましょう」

それから藍も元の場所に座ると、三人でお茶を飲んで一息。

名も無き彼は庭に続く縁側に座りながら羊羹を食べ、小さく千切った羊羹を小鳥に食べさせたりしていた。

「それで、紫様？」

「ええ。彼の名前はね――――――――」

こうして八雲家に新たな家族が増えたのである。

第三節

幻想郷。そこには人間、妖怪、妖精などが住まう最後の知られざる楽園のような場所。

そこの道先案内人、幻想郷の賢者と呼ばれる八雲紫がいる八雲屋敷。そこには九尾の妖狐である従者の八雲藍、その従者の猫又妖怪の八雲橙が同居しており、三人の家族に新しく一人の男が加わった。

「おーい！どこに行ったんだー！」

「藍様！私はこちらを探してきますね！」

「まったく・・・目を離したらすぐにいなくなるなんて本当に子供ね・・・」

「紫様、その台詞、もう二十八回目です」

誰かを探しているのか、三人は屋敷内を歩き回り、声を掛けていた。手が掛かるわね。とこめかみを押さえる八雲紫、まあまあ。と諌める八雲藍はヒタヒタと屋敷の廊下を歩く。

この主従コンビが魔の森から連れ帰った“災厄（ノヴァ）”と呼ばれる太古の神。その彼が目を離した隙にいつの間にかフラフラといなくなって

いたのだ。

彼を探して屋敷内を歩いているのである。

「結界から出た形跡はないし、何か能力を使った跡もないからどこかにいるはずなんだけど・・・」

「ですが探知の術を使っても見つけられないと・・・」

「ええ。あれだけの神氣やら妖氣を持っているはずなのに、何かにジャミングされてるみたい（・・・・・・・・・・・・・・・）で見つからないのよね～。なんでかしら？」

彼を見つけた際に感じた妖氣は二人の巨大な妖氣を合わせても優に超えるような容量を持っており、さらには神氣や霊氣、人間が誰もが持っているだろう、氣すらも妖氣と同じくらい持っていることがわかったのだ。

これだけを見れば、たとえ幻想郷にいる最強と謳われる大妖怪が束になって挑んでも、間違いなく敵わないだろう。

まだどれだけ戦えるかわかっていないが、なんらかのきっかけで暴走すればそれこそ世界の終焉となり得るのである。

「“蒼空”～！どこにいるの～？」

「・・・あ。紫様、あれを・・・」

「見つかったかし・・・あらあら」

八雲家はそんな彼に“蒼空”という名を与え、八雲の姓も与えた。

紫が集めた“災厄(ノヴァ)”の情報を纏めた文書にあった“彼の者、全てを受け入れる大空の如し”というフレームから空を表す蒼空という名に決めたのである。

そんな彼は庭に続く縁側に大の字になって寝ており、回りやら腹の上には猫や動物などが安らいでいるかのようにぐっすりと寝ていた。

・・・よくよく見たらすっぽりと蒼空に嵌まる橙の姿も・・・。

「呆れた・・・橙、まさかここで一緒に寝てるなんて・・・」

「おい橙。起きるんだ」

「にゃふ～・・・にゃ？藍しゃま？」

取り敢えず、橙を起こしてから今日の予定の変更をすることにした。

予定としては、今日は八雲紫の友人である西行寺幽々子と会わせ、蒼空に世の中と人々に触れさせようということなのだが、本人は絶賛爆睡中。

「・・・仕方ないわね。今日は食料を買いましょう。蒼空がしこたま食べるからすぐに無くなるわ」

「わかりました。多目に買っておきましょう」

「よく食べますからね。蒼空さんは」

『ウー？』

「・・・って蒼空、貴方いつ起きたのよ？」

『サッ、キ。ナン、カ、ヘン、ナ、カン、ジガ、シタ、カラ』

「はい？」

紫は頭を悩ませながら蒼空の言葉の意味を考えた。

蒼空は何かを感じる勘のようなものがずば抜けており、自分がわからないように能力を使っても一瞬で見破るほどの野性的な危険察知能力を持っている。

彼が変な感じがするなら幻想郷のどこかで異変のようなものが起きているのだろうか？だとしたらすぐに調べなければならないが、どうすればいいのかまだわからない。

そんな風にうんうん頭を悩ませていると・・・。

ぐきゅ～～～～～

『オナカ、スイタ』

ごんっ！と紫は炬燵の台に頭をぶつけるとのろのろと頭を上げ、額を擦りながら蒼空を恨めしそうな、呆れたような目で見る。

私の苦労というか頭を悩ませたのはなんだったんだ！紛らわしすぎるのよ貴方は！

「あー、頭が痛いわ・・・藍、蒼空も連れて買い物に行きなさい。私は少し寝るわ」

「あ、ちょ、紫様！」

『ユーカ？』

なんとも平和な八雲家であった。

「いいか蒼空。あまりちょろちょろ動いたりはするなよ。私の傍から離れるなよ？」

『アイー』

「って言ったそばからこれか！待て蒼空！」

現在の時刻は夕刻前。主人である紫の命により、藍は蒼空と人里までやって来て買い物をすることになった。

だが、蒼空は人里に入った途端にフラフラ～とどこかへ行こうとし、

藍は自身の九本の尾で捕まえると、重くため息をついた。

紫様・・・なぜ蒼空まで・・・。

ちなみにではあるが、蒼空の身長は紫や藍よりも高く、蒼空を見る時は少しだけ顔を上げなければならない高さである。

こんなに大きい青年が子供のような精神があるとなると、藍の苦労も絶えなかった。

藍はそんな彼を九本の内の三本の尾で掴み、引き摺りながら人里で野菜やら果物を買い漁るように購入する。

そんな二人は人里の人々の注目の的になり、特に見たことがない蒼空をガン見していた。

藍はスキマ妖怪の従者であり、たまに人里に来るから知られているが、蒼空は見たことがない上に、溢れる魅力に気になる様子の人々であった。

「おう・・・兄ちゃん？それとも姉ちゃんか？これ、食べるか？」

『クラウー』

「はっ！？」

人里を歩き回っていると、いつの間にか蒼空が近くの団子屋で店員？と話しており、藍は後ろを弾かれたように見る。

捕まえていたはずの蒼空はいつの間にか抜け出しており、跡には虚しく、彼女の三本の尾がヒラヒラと舞うように浮かんでいた。

そして声がした方をまたバッと見ると、店員？からもらったのか、団子を食べる蒼空が地面にヤンキー座りしていた。

「そ、蒼空ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

『ンー、ランモ、クラウー？』

日が沈みかける人里にて、藍の絶叫のような叫びと暢気に団子を食べる蒼空の暢気な声が響くのであった。

第四節

『ユ、ユーカ？』

「違う。紫様、ゆ・か・りだ」

『ユ、ユーカイ？』

「誰を誘拐するんだ。はいもう一度。ゆ・か・り」

八雲屋敷。明朝からとある屋敷内の部屋にて八雲藍と八雲蒼空は向かい合って座り、何かをしていた。

藍の言葉を復唱するように蒼空が繰り返すが、うまくいってない様子である。

近くでは、紫と橙が蜜柑をもしゃもしゃ食べながら教師（藍）と生徒（蒼空）の様子を見ていた。

「・・・おかしいわねぇ・・・最初はすぐに言葉を理解したのに今は悪戦苦闘してるみたいだわ」

「ですねぇ・・・」

蜜柑をまだもしゃもしゃ食べる二人は頭に大量の？を浮かべる蒼空

を見て不思議そうに呟いていた。

文々。新聞を見た時にはすぐに自分達と同じような言葉を話したのに、なぜか今は藍の発する言葉が理解しきれずにいるのだ。

不思議に思わない方がおかしいだろう。特に紫は蜜柑を口に運びながら真剣な目で蒼空を見ていた。

「（まさかとは思うけど、あの子の能力が関係してるのかしら？調べようとしても、すぐに見破られて睨まれるし・・・）」

“災厄（ノヴァ）”が八雲蒼空になってから、もう季節は何度か繰り返されている。

それほどの時が過ぎても、いまだに普通に話せない蒼空に紫は少しだけ頭を痛めた。

最初、八雲紫は“災厄（ノヴァ）”を式神とし、幻想郷の新たなる秩序として、目覚めさせる予定だった。

だが、蓋を開けてみればあの竜のような図体からか弱い人間のような肉体になってしまい、精神もまるで子供のようだという結果になった。

・・・本当に彼はあの“災厄（ノヴァ）”なのかしら・・・？と思わずにはいられなかった。

『ウ、ウー？ユ、ユ、ユーカ？ユーカィ？』

「うーん。発音は微妙にあってるんだがな・・・ゆ・か・り。紫様だ蒼空」

・・・でもいいわね。と幻想郷の賢者は思う。

彼、蒼空の頭を捻りながら藍の言葉を復唱する姿はそんなことはどうでもいいと思わせられるから不思議だ。

これが、世界の始まり、世界に愛された存在ということかしら・・・？

伝承では世界に封印された悪とやら、世界に愛されたからこそ封印されたとあるが、正しいのは後者だろう。

『ユ、ユカイ？』

「・・・愉快になってしまった・・・」

一生懸命に教えていた藍はずずーんと床の畳に手と膝をつけた。

ああ、ついに藍がやられたか・・・蒼空、あまりわかってないみたいだから辛いのでしょうね。

でも頑張るのよ八雲藍！貴女は私の式なんですから！

『ウィアー』

「ってまた脱走しようとしてます紫様！」

「ああ、もう！なんでいつもいつも逃げ出そうと・・・待ちなさい蒼空ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

『ミーターウー』

てててーっと部屋から廊下に出た蒼空は長い裾を揺らしながら走り、玄関に向かうのが二人には見えた。

落ち込む藍を紫が蹴り起こし、橙と追い掛けさせ、自分はスキマから蒼空を追い掛けることにする。

蒼空は何度も言うが、いい意味でも悪い意味でも純粋な子供である。

彼が見るものは新鮮で、好奇心を擽るようなものばかり、周りに溢れているためにこうしてしょっちゅう脱走しては、探検をしている。

最初は紫もある程度のことは許していたが、それは間違いだと気付くのに時間は掛からなかった。

前に脱走して人里に行くと、団子やら果物やらを食い逃げしたり、どこかの家に突撃して飾っていた家宝のようなものを割ったり、守護者と呼ばれる半人半獣の昼食を盗み食いして追い掛けられたりと散々なことになっていたのである。

それにより、半人半獣の守護者によって、保護者がいなければ蒼空を極力人里には入れるなという有り難いお言葉を戴いたのである。

ちなみに、半人半獣の守護者、上白沢慧音が密かに蒼空と会い、言葉を教えてるのは余談である。

『ウーウーウー♪』

「いやに楽しそうね！？いいから待ちなさいよ蒼空！」

「紫様ー！」

八雲屋敷から脱走した蒼空は鼻唄を歌いながら、裾を揺らし、スキップをするかの如く、森の中を走る。

まずいわ・・・あの時みたいに妖怪に出くわして暴走されたら堪ったもんじゃないわよ！？

紫はスキマから手を出して蒼空を捕まえようとするが、持ち前の天性の勘により、回避される。

その間も、蒼空はどんどん森の中を進み、時には木に飛び移って猿のように移動したりしていた・・・。

「いい加減にしなさい！早く戻るのよ蒼空！」

『ミーミーアーウー♪』

なおも蒼空は嬉しそうな、楽しそうな顔をしながら先々と森を進む。
紫はそんな蒼空を追い掛けるが、夢中になりすぎてその先に紫が望まない場所があることに気付くのはもうちょっと。

『アー』

「はぁはぁ・・・やっと止まったわね・・・」

走り回る蒼空は森を抜けた先、蒼空は黄色い花がある場所に座るように見ており、後ろには息を切らせた紫が蒼空にゆっくりと近付いていた。

蒼空は向日葵を触ったり見たり・・・向日葵ですって？

「しまっ・・・太陽の畑か・・・！蒼空、早く帰るわよ・・・」

『ウー？ユカイ？』

紫は慌てた。たとえ、蒼空を追い掛けるのに夢中になりすぎてもここだということを忘れてはならないのに・・・！

首を傾げながら紫を見る蒼空は向日葵を慈しむように触っており、紫は蒼空の手を取ろうとスキマを開こうとしたが・・・。

『・・・ウ？』

ズドォン！！

どこからか飛んできた物体により、蒼空が立っていた場所が削れるように地面が抉れていた。

立っていた蒼空は避けたのか、少し離れた場所で四つん這いになりながら唸っていた。

「まるで獣ね。そう思わない？紫」

「風見・・・幽香・・・！」

襲撃者は向日葵が咲き乱れる幻想郷でも有名な場所、“太陽の畑”の管理人のような存在。

彼女の名は風見幽香。幻想郷最強の四天王に数えられるフラワーマスターの称号を持つ大妖怪であった。

密かに、賢者である八雲紫はこれから起こる現象をどう止めようかと考えていた。

第五節

「いったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！離せ！離しなさい！」

『ウガーガウガウー！』

「ああ、やっぱりね・・・」

“太陽の畑”にて、緑の髪の花妖怪が黒く長い髪の太古の神に頭をかじられ、それを金髪のスキマ妖怪は悟りを開いたような顔で眺めていた。

なぜこうなったかは、少しだけ時間を遡ろう。

『グルルル・・・！』

「あら。なかなかの殺気を出すわね。獣のくせにして・・・紫、コレは貴女のペットかしら？」

「・・・いいえ。私達の新しい家族よ幽香。それとあまり見くびらない方がいいわよ。あの子、貴女より強いから」

「へぇ・・・それは楽しみ、ね！」

花妖怪、風見幽香は自分の日傘を武器のように使い、蒼空を叩くように振るう。

あまりのスピードに、普通の人間には捉えられないが、蒼空は首を横に動かすだけで避ける。

その反応に予想していなかったのか、目を見開く幽香だが、すぐに顔を引き締めて日傘を連続で振る。

それに反応し、蒼空も目で見切り、全てを避ける。

「へぇ・・・これは楽しめるわ・・・こんなに血が沸き立つのは久しぶりね！」

『アグッ！』

日傘を避けた蒼空の隙をついてか、右足の蹴りで腹を蹴る幽香に、蒼空は吹き飛ばされる。

飛ばされる蒼空は足で踏ん張りながら堪えると、跡には地面が抉れていた。

「さあ・・・これには耐えられるかしら？」

―元祖・マスタースパーク―

日傘から放たれるビームに紫は驚き、蒼空を見るが、心配は無用だった。

蒼空は右腕を前に突き出すと、左手で添えるように置き、足でしっかりと大地を踏みしめた。

幽香は日傘を前に出しながらも、蒼空の行動を怪訝そうに見るが、理解はできなかった。

そして・・・

『イタダキ・・・マス・・・』

ゴバァッ！！

「！？な、なによアレは！？」

風見幽香はそれ（・・）を見て狼狽える。

何もなかったはずの、相手にしていた蒼空の右腕から異形の化け物の頭が生えるように変わっており、その禍々しい口を大きく開けてマスタースパークを飲み込もうとしていたのだ。

実際に、そのマスタースパークは右腕の化け物の頭にバクリと喰われ、マスタースパークは跡形もなく、消え去った。

「・・・馬鹿な・・・なんなのよアレは・・・はっ！？」

しばらく呆然とする幽香だったが、蒼空の姿がないことに気付き、慌てて周りを見渡すと背中から衝撃が伝わる。

しまった！と思いながら後ろを振り返る幽香が見たのはキラリと光る人間の歯であった。

ガブリッ♪

「いったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そして現在に至る。幽香はまだ蒼空に頭をかじられており、涙目に

なりながら蒼空を頭に装備したまま、“太陽の畑”を走り回る。

ああ・・・私もあんなだったわね。としみじみと思う紫は自分がやられたことを思い出し、頭の帽子を押さえて頭をガードした。

藍からのご褒美で蒼空は幻想郷名物の饅頭をもらい、それを楽しみにしていたが、寝惚けた紫がそれを食べてしまったのだ。

それにより、蒼空は半泣きしながら紫の帽子のない頭にかじりつき、二時間ほど放さずにいたことがあった。

紫は今の幽香のように涙目になりながら八雲屋敷をバタバタと走り回り、蒼空の頭かじり（橙命名）が完全なトラウマになってしまったのである。

それを普段は会わないような、人里の守護者、上白沢慧音に相談してたことは本人のためにも割愛する。

「紫様ー！紫様ー・・・って蒼空？と風見幽香？何をしてるんだ？」

「あ、あら藍。どうかした？」

「あ、いえ。こちらから巨大な妖氣を感じたので来たのですが・・・あれ、なんですか？」

藍が指差す方には涙目どころかマジ泣き寸前の風見幽香、その幽香を背後からガッシリとホールドして頭にかじりついている蒼空がいた。

幽香は蒼空を退かせようとするが、力が思った以上に強く、外れない。さらには抵抗すればするほど歯が頭に食い込むといった悪循環に幽香は紫と同じようなトラウマが芽生え始めていた。

少しだけ震えている主を見た従者はため息をつき、手を遠くの場所に声が届くような形にすると、蒼空に呼び掛ける。

「蒼空ー！そんなもの（・・・・・）食べても体に悪いからこっちに来なさい！」

『ウ？ラン？』

「そんなものってなによそんなものって！ふざけるなよ九尾の・・・あぁぁぁぁ！歯が！歯が食い込んでるぅぅぅぅぅぅぅ！！」

『ラン、バカニスル、ユルサナイ』

「わかった！謝るから放して！血が！血が滲み出てるのよぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

「・・・・・・貴女によーくなついてるわね。藍？」

「ま、まあ・・・」

紫は恨めしそうに藍を見るが、蒼空は現段階では藍によくなついている。

理由はまあ・・・よく料理を作ってくれるからだろう。

ご飯大好き→でも自分は作れない→作ってくれる奴、藍→藍のご飯、美味しい→藍、大好き。みたいな子供の思考回路で藍に一番なついているのである。

他にも、人里の団子屋の主人や果物をくれるおばちゃんも好きだと認識しているが。

橙も料理を運んだりするところを見てるため、好感度は良好だが、紫はまさにニートのように料理を作ったり、運んだりしないために好感度はどんどん下がっている。

最近では、従者の藍に料理を教わる紫の姿がよく見られるとか見られないとか。

「ほら。いいから離しなさい」

『ウー』

「いたたた・・・禿げるかと思ったわ・・・紫、なんなのよそいつは！？」

幽香が紫に叫ぶが、ギラリと光る蒼空の歯にウッと気圧され、トーンを落として会話をする。

紫は“災厄（ノヴァ）”だということをはぐらかしながら蒼空を紹介するが、当の本人は幽香に飽きたのか、藍と向日葵を鑑賞していた。

ウーウー唸りながら向日葵を挟むように手を翳すと、淡い緑の光が向日葵に吸い込まれ、幽香は驚愕する。

「花が・・・喜んでる・・・？」

「・・・万能すぎるわね（ボソッ」

二人は愕然とした様子だが、蒼空はアーアー言いながら喜んでおり、藍も自分の子供を見るような優しい目で蒼空を撫でていた。

その後、蒼空は藍の尻尾に引き摺られて帰宅し、説教を受けたのはまた別の話。

第六節

『アーウー、ミ、ミカウー？』

「違う。みかん、みかんだ」

「頑張れ兄ちゃん！」

「私達がついてるよお兄ちゃん！」

幻想郷の人里。そこの寺子屋にて半人半獣の上白沢慧音は友人のような、八雲藍から八雲蒼空を預かり、言葉を教えていた。

蒼空はウー？と口ごもりながら何度か“みかん”と言おうとしているが、うまくいかない様子。

周りの子供達も蒼空を応援しながら勉強するというなんとも平和で穏やかな時間が寺子屋で行われていた。

「はい。みかん」

『ミ、ミカウー？』

「うーん。藍が投げ出したい気持ちはよくわかるな・・・近付いてるんだか、遠ざかってるのかよくわからないな」

慧音は蒼空と向き合い、言葉を教えながら、蒼空を連れてきた藍の疲れた様子を見て納得した。

これはなかなかの問題児だな。と慧音は考え、自分がなんとか彼を喋れるようにしなければと改めて決意した。

預けた藍は永遠亭の八意永琳のところに行き、蒼空の容態というか、喉の発声機能について聞きに行っている。

もしかしたら言葉は理解しているが、発声機能に問題があって喋れないのでは？と冗談半分で言った自分の言葉がまさかこんなことになるとは予想しなかった慧音であった。

教材を持ちながら目の前の大きな子供の青年を見ると、胡座をかいてその中にはすっぽりと人里の少女が座っており、楽しそうに蒼空とみかんを繰り返し話していた。

それを見てると、慧音は素直に和むのを感じた。

藍によれば、彼は妖怪にも（・）カテゴライズされるが、人里の人間達には絶大的な信頼関係を築いていた。

最初は蒼空は人里のあらゆる食べ物という食べ物を喰らい尽くしたが、なぜか人里の人間はあまり怒る気になれず、むしろ格安、たまに無料（タダ）で食べ物を与えていた。

子供達も、彼を受け入れて大きな友達のように接しており、彼を嫌うものは今はもういない。

これが彼の魅力なのか。と慧音は感心しながら蒼空を見れば・・・
机の前から膝にいた少女と消えていた。

あれ！？と思い、教室を見渡せば、蒼空の大きな背中が見え、周りには子供達が群がり、何かをしているのがすぐにわかった。

慧音は気になり、覗きこんでみると、机の上には何処からか迷いこんだ小さな小鳥が怪我をして力なくピーピー鳴いてるのが見えた。

「兄ちゃん、なんとかならない？」

『オレ、マカセル。コイツ、ナオス』

「お、おい蒼空？何をしてるんだ？」

慧音が戸惑う間に、蒼空は向日葵を元気にした時のように両手を挟むように小鳥に翳し、ポウッと淡い緑の光が放たれると小鳥を包む。

何を・・・と言おうとするが、緑の光が消えると慧音は幽香のように愕然とする。

「わー！すげー兄ちゃん！」

「小鳥さん、治ってるよ！」

『ウー♪』

元気が無かった小鳥はピーピーと元気よく鳴き、怪我をしていたであろう右の羽も治っていた。

パサリと教材に使っていた本を落としたことに気付かない慧音は頭に小鳥を乗せて喜ぶ彼をあり得ないような目で見ていた。

馬鹿な・・・妖力も何も使ってないのになぜ治る？霊氣や氣を使った気配はないのに。と慧音はさらに愕然とした。

お前は・・・君は・・・何者なのだ？と慧音は聞きたかったが、子供達と無邪気に笑う彼を見るとそんな気持ちは消えていく。

・・・ふっ。後で藍から聞いてみるか。

「さあさあ。遊んでないで授業を再開するぞ。元の場所に座るんだ」

「「「「「え～～！」」」」」

『ウーウー！』

「つべこべ言うなッ！！」

ガコン！ガコン！ガコン！ガコン！ガコン！

昼前の寺子屋に何かを殴るような音が響いた・・・。

「・・・珍しいわ。私も長いこと生きてるけどこんなのを見たことがないわよ？」

「詳しく、お願いできますか？」

「今からするわ。うどんげ、カルテと薬をお願いね」

「はい師匠」

その頃、八雲蒼空を預けた八雲藍、主人の八雲紫は永遠亭の八意永琳の場所に訪れていた。

以前に蒼空が不注意でガラスで指を切った際に出た僅かな血を彼女に渡し、二人はカルテを持つ永琳の話を聞いていた。
上白沢慧音の発声機能に問題があるのでは？という指摘に永遠亭に来たのだが、永琳は頭を悩ませながらカルテに何かを書いていた。

「正直、信じられないわ。こんな血、初めて見る上に妖氣やらなんやらかなり詰まっていて危険すぎるのよ」

「・・・紫様」

「ええ。永琳になら話してもいいかもしれないわね・・・八意永琳、今から言うことは内密にお願い。あまり知られるとパニックになる可能性があるから」

「・・・そんなに厄介なことかしら？」

真剣な表情の永琳に紫は蒼空のことを包み隠さずに話した。
“災厄（ノヴァ）”であること、何か特殊な能力を持ち、まだわかっていないこと、うまく言葉が喋れずに困っていることを全て。
話を聞いた永琳はこれでもかというくらい目を見開いて驚いており、“災厄（ノヴァ）”の情報が詰まる文書を見ていた。

「まさか・・・実在するなんて・・・あれはお伽噺ではなかったの

？」

「・・・永琳、貴女、何か知ってるのね？」

ええ。と答える永琳は遥か昔、自分がまだとある都市のリーダー的な存在だったことまで記憶を遡らせた。

それは・・・八意永琳という女性の淡い初恋と失恋の物語でもあった。

それを静かに、二人に話し始める。

そして知る。八雲蒼空・・・いや、“災厄（ノヴァ）”の知られざる過去の一部を。

『ダーンーゴー♪』

「ああ・・・私の、私のお金が消えていく・・・」

「慧音先生、まけますから元気を出してくだせぇ。この坊主はよく食べるから仕方ありませんって」

一方、人里では蒼空が団子屋で団子を食い漁りまくっていた。

頑張れ慧音。もう少しで君の未来は光が満ちる・・・たぶん。

第七節

そうね・・・あれはまだ私が幼い頃、一人で街の外に出た時かな？
森で薬草を摘んで帰ろうとしたら迷ってしまったのよね、これが。
後から気付いたんだけど、妖怪の幻術で道を惑わせたみたいでね？
私は延々と森の中をさまよい歩いたわ。

『うー？おまえ、だれだ？』

『ッ！！』

そこで出会った。妖怪なのに妖怪らしくない彼に。
あの時、彼は凄く長い黒い髪をして、そうね・・・着流しみたいな和服に長い羽織袴を履いていたわね。
金色の目で私を見ていたけど敵意なんか感じなかった。むしろ、初めて見たものを見るかのように好奇心が溢れたような、そんな感じかしら？
彼は私が迷っているのを聞くと、ニコリと笑って私の小さかった体を持ち上げて肩車すると陽気に鼻唄を歌いながら森の外に案内してくれたわ。

『ここ、でぐち。おまえ、かえれる』

『・・・あ、あの、貴方は・・・？』

『・・・う？おれ、なまえない。ずっと、ひとり、だから。もうすぐ、ここ、あぶない、さっさと、かえる』

『あ、ちょっと待って・・・』

そう言った彼はまた鼻唄を歌いながら森の中に消えて、私は迎えに来た街の人に連れられて帰ることになった。

「・・・んん？それ、何か関係あるの？」

「やーね。私のノロケ話だから聞いてよ」

「・・・はっきりと言いやがった・・・」

それから私は森に行っては彼と会い、話したりした。

その時から私は彼が気になり、なんでも話したり、尽くしたりしたわ。

「完全にノロケ話じゃないの・・・」

時が経つ度に、私は少女から女性に成長したけど彼はまったく変わらない容姿で、子供のように無垢なままだったわね。
たまに彼から聞かされる“ノア”の話が貴女の“災厄(ノヴァ)”の話と一致するのよね～。

「ノア？ノヴァじゃなくて？」

「確かに彼はノヴァではなく、ノアと言っていたわ。太古から存在する、世界の化身のような存在だって」

「・・・確かに書いてあるわね・・・」

紫は文書を開いて読んでみると、確かにノアとは書かれてないが、世界の化身のような存在と書かれている。

「・・・でも私は・・・」

彼と会う度に私は少しずつ、少しずつ惹かれていった。彼の魅力に、優しさに、無邪気なところに。

でも突然に終わりは来た。

都市の“月移住計画”により、私は無理矢理に月へ飛ぶロケットに乗せられた。

飛び立つ際に、彼はいつもの場所で座りながら私が乗るロケットを見上げており、うー？と首を傾げているのが遠くでもよくわかった。

月に到着すると同時に聞かされた地上の穢れを一掃するという馬鹿げた計画。それは妖怪であった彼も例外ではなく、地上に残った都市の人間が粛清という名の殺戮を開始した。

森は焼かれ、綺麗だった湖は血や土で汚れ、大地は妖怪や人間の血に穢され、地上は滅んでいった。

そして・・・彼も。自分が作った武器によって殺されるのがまざまざとモニターに映され、私は目の前が真っ暗になった。

虫の息の彼は、血だらけになりながらも何処かへ体を引き摺りながらも移動するのも映された。

その手には私が遠い昔にあげた彼の黒い髪に似合う髪留めがあり、私は嘆いた。自分の力不足、彼を連れていけなかった自分を。

『ごめんなさい・・・貴方を救えなかった・・・！』

私は見ていられなくなり、宛がわれた部屋で一人、涙を流した。

その時、私は見ていなかったけどその場に残っていた者はみな、こう口を揃えたわ。

「まさに世界の終末を見た。とね」

「世界の終末を？ならなぜ私達はここにいるのだ？」

「わからないわ。私はあの場にいなかったし、録っていたはずの映像も完全に消えていたし、誰も話そうともしない上にトラウマができた者が多かったんですもの」

「・・・話はだいたいわかったわ・・・なんか暗いけどノロケ話よね？ノロケ話でしょ！」

うがーっ！と永琳に掴み掛かる紫を藍と永遠亭で八意永琳の助手をするうどんげこと鈴仙が羽交い締めにして押さえる。

永琳は暢気にお茶を飲み、少し頬を染めてうっとりとしていた。

「そ、それより！蒼空を迎えに行きませんか？・・・慧音の懐が寒くなる前に」

「・・・・・・そうね。永琳、悪いけど私達は失礼するわ。また何かあったら教えてちょうだいね？」

「なら今度連れてきなさい。それなら詳しく検査できるしね」

いいわよ。と答えようとするが、紫は永琳の目が捕喰者のそれと同じだということに気付き、決意する。

捕喰(コイツ)者には蒼空と会わせないようにしよう・・・と。

藍もそれに気付いたようで、紫と視線だけで会話を交わすと、すぐに永遠亭から出ようとする。

「あ、そうそう。声が上手く出せないとかって言ってたわね？発声機能に問題があるパターンもあれば、何かのトラウマか精神的な問題で出せないこともあるから。例えば、肌身離さずに持っていたものを無くしたとかね？」

「・・・・・・あ。心当たりがあるわね」

「髪の毛、ですね？」

「そうと決まれば帰って調べてみましょうか、藍？」

スキマを開いて蒼空を迎えに行こうとするが、藍がいつまで経ってもスキマに入ってこないため、不思議に思う紫が振り返ると・・・。

・・・見なければよかった。と紫はげんなりしながらそれを見た。

「ゆ、紫様！ヘルプ！ヘルプです！」

「八雲紫？その蒼空とやらを連れてこなければこの劇薬を貴女の従者に打つわよ？」

紫が見たものは永琳に首を掴まれながら首に注射器を刺される藍が涙目でこちらに救難信号を必死で出していた。

脅迫する永琳は歪んだような笑いをしながらグイグイと注射器を藍の首に押し込んでいた。

そんな従者を見た紫が選択したのは・・・。

「今日の夕飯まで帰ってきなさいよ」

「え・・・紫様・・・？紫様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

従者である八雲藍を見捨てることであった。

スキマに消えた紫を藍は絶叫しながら手を伸ばして助けを求めていた・・・。

「ふふふふ・・・うどんげ、新しい実験台が手に入ったわ。新しい薬を投薬して実験しましょうか」

「はーい♪

（今日は投薬の実験台にならなくて済む！やったわ！）」

「・・・・・・そ、蒼空・・・私はお前が好きだったぞ・・・」

『ウ、ウー？』

「ん？どうしたんだ？まさか・・・まだ食べる気か？」

『ウ？クーラーウー！』

「あ゛！しまった！」

人里ではのほほんとする蒼空と慧音がいたとさ・・・。

第八節

「ねー藍ー、私が悪かったから許してよー」

「嫌です。あんな走馬灯が見えたような体験をさせられたら許すわけにもいきません。ほら、口がまた汚れてるぞ」

『うー♪』

「・・・なんか私のポジションが盗られた気がするのですが・・・」

昼の八雲屋敷。そこに住まう妖怪三人＋種族不明神様（精神子供）は昼食を食べていた。

家長？である八雲紫は八雲藍によって飯抜きの刑を与えられ、ぶーぶー言いながら藍に掴み掛かっていた。

藍がギラリと睨むと紫はすごすごと引き下がり、大量の蕎麦を啜る八雲家の大食らいを恨めしそうな目で見ていた。

種族不明、世界最強、幻想郷の王者たる子供な神様である蒼空はウーウー嬉しそうに唸りながら右手に持つ箸でどんどんざる蕎麦をつゆに付けて食べていた。

橙はなぜか自分のポジション、藍の癒し（？）ポジションを盗られた気になり、複雑そうに蕎麦を啜っていた。

「紫様、今日はどうなさるつもりですか？」

「うー、最近、藍が冷たいわねー・・・予定としては霊夢か幽々子に蒼空を会わせる予定よ。永遠亭は顔を出したし・・・ねぇ？」

「・・・・・・あれは酷かった・・・」

顔をひきつらせる藍。どうやら永遠亭で何かがあったようだ。

ちょくちょく蕎麦に手を伸ばす紫の手をピシャリと叩くと紫は口を尖らせながらお茶を飲む。

「まさか蒼空がいきなり鈴仙に噛みつくとは予想できなかったわ」

「・・・ええ。八意永琳のうどんげに反応して鈴仙をうどんと勘違いして頭にかじりつくなんて誰も予想できませんよ紫様。それとスキマから蕎麦を食べようとしないでください」

「ちっ」

舌打ちをする紫にため息をつく藍。

やれやれと箸を蕎麦に伸ばすが・・・ピタリ、とその動きを止める。

なぜなら、もう無いのだ。蕎麦が。軽く八人前のざる蕎麦を作っ

たはずなのに跡形もなく消えており、残るは蕎麦を盛っていた皿だけである。

『うー♪おいし、かった♪』

「・・・え？いくらなんでも早すぎじゃない？八人前を作ったはずよね？藍」

「え、ええ・・・日に日を重ねるごとに食う量とスピードが上がってる気が・・・」

「蕎麦が・・・ない・・・！？」

八雲家絶句。たった一人で蕎麦を食べた蒼空を見るが、本人はうーうー言いながら手を合わせており、何処吹く風のように三人の視線を受け流していた。

食べ尽くした蒼空に文句を言おうと蒼空を見れば・・・誰もいなかった。

あぁ！？と三人は叫び、ガタガタッと立ち上がるとキョロキョロと周りを見渡す。

『うーうー♪』

「あ！いました！」

「また脱走か！橙、追い掛けて捕まえるぞ！」

「了解です藍しゃま！」

従者である藍と橙はててーっと廊下を走る蒼空を追い掛けるために立ち上がったが、紫は僅かに残っていた蕎麦を食べており、藍のハイキックなソバットが後頭部を撃ち抜き、気絶する。

藍はズルズルと紫を引き摺りながら楽しげに鼻唄を歌う蒼空を追い掛けることにした。

・・・まったく。何も変わってないな・・・声は上手く出せてるのにまだまだ子供だな。

蒼空が声を上手く発音できるようになったのは、一重に八意永琳の治療によるものである。

目覚めたばかり（にしては何年か過ぎてるが）の蒼空の喉の発声機能は舌が回らないというなんとも間抜けな診察結果が出、永琳が三日かけて投薬で正常に戻した。

よって、蒼空は“ユカイ”をちゃんと紫。と発音できるようになり、八雲紫は発狂して自分の屋敷で転がりまくったのはいい思い出である。

そして藍もまた、蒼空から“藍、大好き”発言を受けて狂喜乱舞し、蒼空を窒息死しかけさせたのも秘密である（豊満な胸に溺れ死にかけた）。

・・・橙は、まあ・・・肩車してくれたりとか色々あった。うん。

「藍しゃま～！蒼空さんが人里に向かいました～！」

「・・・ということは慧音の寺子屋に行くつもりなのか？」

「ねえ！ちょっと藍！引き摺りすぎて私の頭が禿げかけてるんだけど！？あぁぁぁ！痛い痛い！削れてる削れてる！」

あの、藍様・・・と橙は声を掛けるが、藍はガン無視。紫の足首を持ち、引き摺ったまま歩いていた。

御愁傷様です、紫様・・・と橙は心の中で紫の頭が禿げないことを祈るしかなかった・・・。

所変わって人里の寺子屋の慧音が自宅として使っている部屋。そこに慧音と蒼空がいた。

「そうそう、そんな感じだ・・・ん？藍に橙か？その引き摺ってるのは・・・紫か・・・」

「こんにちは慧音。蒼空は何をしてるんだ？」

「見ての通り勉強だよ。言葉を覚えたいから教えてと言われてな、取り敢えず授業をしている。他の子供達は今日は来てないしな」

慧音の視線の先には蒼空が教材らしきものを持って字を書いていた。

うーうー唸りながら頑張って書く蒼空の隣には白い髪の少女がおり、藍は珍しい。とボヤいていた。

『じーんーじゃー』

「そうそう。上手いじゃない。次はこれね、そこの紙に書いてみて」

『うー』

「上手く発音はできてるが、なぜエコーがかかったようになるのだ？男にも女にも聞こえるからビックリしたぞ」

「声帯が誤作動を起こしたみたいになってるらしい。永琳の薬を飲ませて治療してるがまだかかりそうだ」

「ふむ・・・なら気長に待とうか。それと、あれは？」

「初めて会った時に切った大量の髪の毛の中から見つかったものでな、紫様が持ってて回収して蒼空につけたんだ。似合うだろ？」

「ああ。でもな・・・見方によっては女性のファッションじゃないか？あれは」

「・・・・・・」

黙る藍。慧音は何かあったのだろうか、と考えたが、よくよく考えてみれば蒼空は八雲屋敷にいる。

となれば毎日、あの大食漢である蒼空に食べさせる金がかかったりして苦労してるのでは？と思い、追求しないことにした。

『もこー？』

「ん。なんだ？」

『もこー！』

「ぶっはっ！なんだそりゃ！字は下手なのに絵は上手いとか！」

白い髪の少女、藤原妹紅は蒼空の持つ紙を見て噴き出した。

字が書いてあると思ったが、そこには蒼空の書いた写真のような妹紅の絵が書かれており、見守っていた橙とビックリしていた。

『うー♪』

「上手すぎる・・・お前、よくわからんやつだな・・・」

笑う蒼空の右の髪には宝石のような丸い宝玉が三つ付いており、上から紫色、藍色、橙色に光っていた。

まあ、八雲家の名前の色なのだが、元々は真っ白な透明だったが、触れた時に変色してしまったのだ。

『うあーうー！』

「嬉しいのはわかるが暴れるな～！！」

「こ、こら蒼空！それは私のおやつ・・・アアーー！！」

「・・・・・あれ？紫様は？」

昼過ぎの寺子屋はカオスなことになってた。

ちなみに紫は近くの茶屋で団子を食べてたところを藍に見つかってシバかれたらしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7209z/

幻想郷の子供な神タマ？

2011年12月29日15時49分発行